

平成21年2月22日

パブリックコメント募集に、以下内容を提出させていただきます。

記

「大台ヶ原自然再生推進計画（第2期）（案）」に係る意見

1. 防鹿柵（区域保護対策）について

防鹿柵の効果として、柵内で食痕・剥皮が見られないから目的は達成された、と評価している（36 P）が柵を作れば防止できるのは当たり前。弊害として、実生の発芽・定着環境が損なわれ、ノウサギ・ネズミ類等による実生の採食等の影響が示唆された、としている（37 P）が柵という狭い世界に押さえ込めば当然生物多様性のバランスが変わり自由な自然とは異なるのは当たり前。この当たりの評価にとどめては実験の意味が無い。人為的な柵を作ることが自然再生に役立つのかの評価をしなければ、柵の取組み適否の判断を先延ばしするだけで怠慢になる。図3-1-7（37 P）を見ると、年度経過に寄る植生の変化は柵の内外で変わっておらず、柵の必要性は弱い。

図3-2-3（54 P）は大変貴重なデータでこれを収集発表したことは高く評価したい。この図を見ると東大台には鹿が滞留しているが、西大台には滞留していない。これは餌が少ないからだろう。然るに、図3-1-5（33 P）にあるように西大台にも多数の防鹿柵があり第2期で更に小規模の防鹿柵追加をうかがわせている（74 P）。利用調整地区に指定して価値と必要性を認めている西大台で、必要性の無い防鹿柵を作り置く理由が分からない。西大台の現状を見る限り、防鹿柵は直ちに撤去すべきものであり、第2期計画では西大台は撤去して、今後鹿のGPSデータのように、植生の推移の詳細なデータ収集を立案すべきだ。

2. 実証実験（地表処理）について

現時点では地表処理の有効性を比較評価するまでには至っていない（41 P）としているが、その実験の中にある表層土除去は自然を如何に壊していくか登山道を見れば分かる。水による土壌流失が植生の生育を阻んで再生どころではない。東大台の中でもそれを理由に空中回廊を計画して作り出したくらいだ。充分知りえている大きなマイナス面があり知りえていないことも多々ある表層土除去の実験は、第2期でも続ける計画なら（74 P）長年かかって出来上がっている大台ヶ原の中ではすべきではなく計画から外すべきだ。

3. 東大台周回線歩道整備について

第1期の歩道整備で、それ以前から多額な予算を使って進めていた都会の遊園地的空中回廊建設を中断して自然にマッチした空石積み工法の歩道に切り替え整備した。これは画期的な整備計画だと評価している。係る整備は計画変更後の整備をしたに過ぎず、整備計画の転換は当初の空中回廊も撤去してやり直すことで完遂出来るのであり、第2期にその残計画を取り上げは必須項目だ。然し、短期計画にその実施項目が上がっていない（79 P）。自然を相手にする計画は長期の一貫性のある計画が極めて重要であり、前任者が立てた計画の未完部分を継承しなくて自然に対する計画とは言えない。追加すべきだ。

4. 「マイカー規制の実施（パーク&シャトルバスライド）」について

第1期では実施に向けた具体的な協議・調整は出来なかったと、途中段階であることを報告している（66 P）。時間を要する課題だけに途中段階は致し方ないとして、問題は地域経済の振興に果た

す効果の検討を上げていることだ。入り込みの量と質を改善する為であり振興を考えるのは本末転倒と言わざるを得ない。経済優先で来た結果が現在の自然破壊進行になっているのに、尚未練を持ってしかも環境省が経済振興を考えて取り組むとは本気かと疑う。前任者が利用調整地区の設定で強力に進めた熱意に劣らない熱意で地域振興を脇に置いて取り組み、前進させることだ。その為には短期計画（78P）の中に、社会実験の実施時期を明記して取り組むべきだ。

5. 新しい利用の在り方推進を含めた計画全体に係る共通の課題について

多様な主体の参画の在り方検討とある（69P）が、広く自由な参画は当然で、参画した人達の意見の吸い上げ方の改善が大事だ。未知の多い自然を相手に取り組む活動は無意味になることが多い。そのリスクを少なくする為には、多くの知見を集めて検討することだ。形式的な参画に留めていては、有益な推進は程遠いから意見にしっかり耳を傾ける参画の場にしてもらいたい。現状はとてもそのような状況とは見られない。課題の中にそのような課題がある旨も織り込み計画（80P）の中に改善を明記すべきだ。

6. 目指すべき大台ヶ原の姿（長期目標）について

目標は定量的でないと評価はいかようにでも出来る。第2期の長期目標（71P）では昭和30年代と時点は定量的だが、評価段階で評価するには難しい定量値だ。代表的指標を定めて計測可能な定量値の目標値が必要だ。

温暖化が急速に進んでいる現状を考えると近畿地方で僅かに残っている大台の寒冷地植生が環境変化で消滅していく流れが予想される。そのような中で自然に逆らって温暖化が進んでいなかった昭和30年代の植生に戻そうとすることが、自然状態で定着できることなのか大変疑問だ。自然環境に適合した植生が最も自然であり、その姿を見極めないで過去に遡るだけの目標が真の長期目標といえるのか？ 無駄骨、税金の無駄遣いにならない為に、温暖化との関係をよく吟味して長期目標を定めるべきだ。

上記2点を踏まえた長期目標（71P）に修正すべきだ。

7. 二ホンジカ個体群の保護管理について

鹿の行動範囲が大台ヶ原の周辺にまで広がっていることが明らかな現状（54P）で、保護管理計画（77P）は、周辺地域関係機関と取組み連携を図るとはあるものの、基本方針や取組み内容をみると大台ヶ原の中だけで生息密度を下げるのが優先されている。優先順位が逆である。

やれることをやる的計画でなく、やるべきことをやる計画にすべきだ。

保護管理計画（77P）の項目の順序を変えるべきだ。

8. キャンプ指定地の設置について

質の高い自然体験をする為にキャンプを可能にすることは大変良い対処だと評価する。然し、注意すべきは、山麓等に作られているオートキャンプ場のような至れり尽くせりのキャンプ地にならないようにすることだ。都会の延長で出かけてくる観光客に対応した東大台の空中回廊の二の舞にしないことだ。計画（79P）の中にその旨が伝わる内容を明記すべきだ。

以上